

石炭、鉄鋼、港湾、そして、鉄道。

北海道の近代化を支えた、

三都を結ぶ物語。



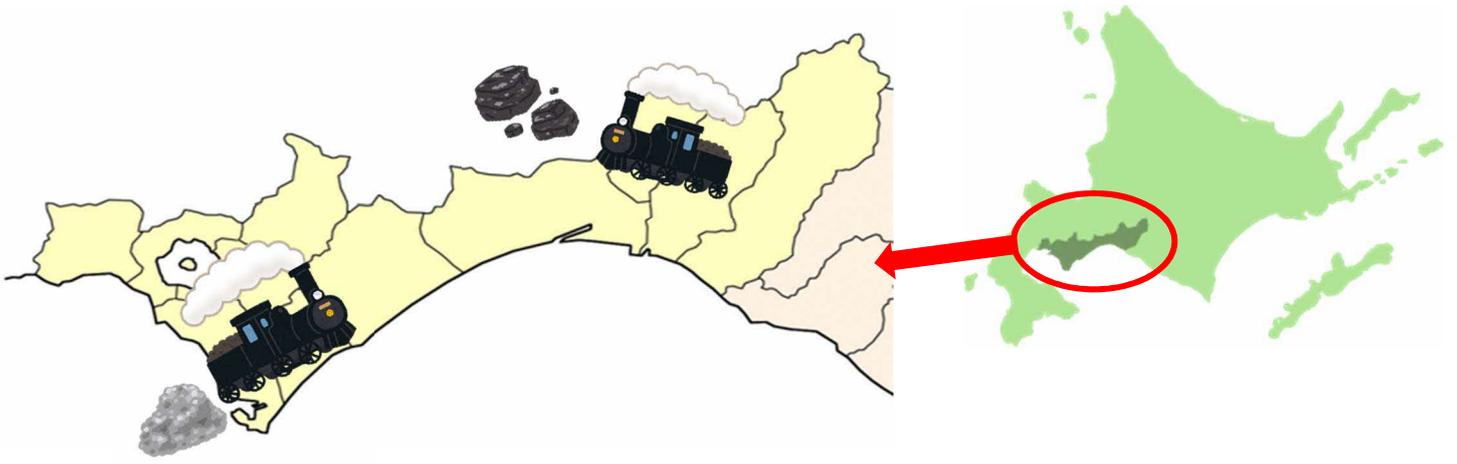
「炭鉄港（たんてつこう）」とは、近代の北海道を築く基となった三都（空知・室蘭・小樽）を石炭・鉄鋼・港湾・鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする取り組みです。

その歴史を紐解くと、北海道の産業革命の物語が見えてきます。この「炭鉄港」のストーリーは、2019年5月20日に、文化庁が選定する「日本遺産」に認定されました。

## いぶり産業遺産 ～炭鉄港～

北海道の近代化の契機は、1879年の官営幌内炭鉱（三笠市）の開鉱でした。空知の石炭を小樽港へ運ぶ幌内鉄道は、札幌の発展にも貢献。1892年に鉄道が延伸された室蘭は石炭積出港となり、1907年には日本製鋼所、1909年には北海道炭礦汽船輪西製鐵場が設立され、室蘭は鉄のまちに。室蘭への鉄道延伸と同時期に、今の安平町内にあった追分駅構内には「追分機関庫」が設置され、運転拠点として活用されました。

空知・小樽・室蘭を結ぶ鉄道と、三都の基幹産業である石炭・港湾・鉄鋼は、北海道の急速な発展を支えた立役者でした。



詳しくは…

炭鉄港	🔍
産業遺産の物語	🔍

## 炭鉄港を形づくる文化財たち

炭鉄港のストーリーを語る上で欠かせない、有形や無形の様々な構成文化財が、炭鉱23、鉄鋼5、港湾5、鉄道12の計45あります。

北海道の急速な発展を支えた立役者の様々な表情を、ぜひ現地でご覧ください。

※公開休止中の施設もありますので、必ず事前に確認されてからご訪問ください。

詳しくは…

各市町村の構成文化財一覧	🔍
胆振管内の炭鉄港（室蘭市）	🔍
胆振管内の炭鉄港（安平町）	🔍

